

弘元寺第二代住職 宥善和尚 今生の積徳を敬仰しての逆修法として

真言密教の二大難行の一つ

《結願日》平成三十年三月三日（土）

「焼八千枚護摩」

練行者 泰教

朝八時より結願の八千枚護摩修行
午後一時半〜四時頃に結願後、
行者より御加持

現住職 正和の実父であり前任職になります宥善は平成三十年に数え99歳となります。弘元寺を開山した父、宥榮の意思を継ぎ、15歳にして愛媛県は石鎚山麓にあります極楽寺に入山。師の弘元房 宥心に従い出家しました。宥心は初代宥榮の師でもあり、弘元寺という寺号の元になる方です。

宥善の修行は1度に1080回、五体投地の礼拝を日に3度。重ねて経や真言を唱えました。育ち盛りの年齢でありましたが食事は勿論精進です。時代も重なり質素のようでした。立つて座って身を投じる修行で膝は血が溜まり、人生の勲章のように跡が残ります。「若くないと出来なかったと思う」という言葉が象徴するように同じことを毎日、半年以上も続けたそうです。そしてやっと次第に弘法大師より伝わる真言宗の僧侶の修行法を筆と墨をもつて書写しては修行をし、護摩を焚いたそうです。

弘元寺開山よりの教えであります「人のお役に立つ」「誰もが救われる」「貧富の差なく誰でも参詣できる」の寺訓を継承し、宥善は厳しい言葉の多い人でしたが、それも師より学んだ教え、十死一生の戦争での体験が根底にあるように感じます。

この度は逆修とありますように、宥善和尚の人の為にと歩まれた人生のご修行の徳を敬い仰ぎ、孫の泰教が修行をさせて頂きます。逆修というのは「生前にあらかじめ（預《逆》）、死後の往生菩提の資とせんが為に善根功徳を《修する》こと」をいい、お地藏さまのお経には「死後の追福はその利益も七分の一しか届かず、七分の六は自身を利益する。ここに逆修は七分の功徳を全て得させるものとなる」と教えます。

身近なところでは、生きているうちに和尚さんより戒をいただき、戒名・法名を授かることを逆修の一つとし、それを印しに位牌や墓石に赤文字で刻むのもこの習いが転じたものようです。何事も生きている内に大切なことは行わなければならないのです。

さて今般は、宥善和尚が今生に積まれました徳を敬い仰ぎ、自身の修行をし、重ねて皆様の御為に祈らせて頂きたく存じます。宥善和尚の逆修と、またその先におわす宥榮、宥心和尚を讃じて、初めて弘元寺の法灯がこれからも続いていくように思います。つきまして、有縁の皆さまにおかれましては、これを機会に一緒になつて、焼八千枚護摩のご本尊である不動明王さまの慈救呪（御真言）をお唱えする修行をして頂きたいと思ひます。

○念誦修行の方法は

ねんじゆしゆぎよう ぼつぽう

皆さまのお唱え下さったお不動さまの真言をもつて宥善和尚の逆修と泰教の修行の無事を祈らせて頂きます。

①「弘元寺 宥善和尚の法灯と焼八千枚護摩 悉地円満の為に〜」と必ず前置きします。

こうげんじ ゆうぜんわじょうのほうとうとしょうはせんまいごま しつち えんまんのために

②不動明王 慈救呪を唱える

「のうまくさんまんだばざらだん せんだまかろしやだ そわたや うんたらた かんまん」

・・・集中してお唱えするのが望ましいですが、家事・洗濯・車の中でも布団の中でもお唱え下さい。

日常のお仏壇のお祈りの時などは、「願以此功徳」の廻向の前等にこの方法でお唱え下さい。

③数をメモしておき、弘元寺の本堂正面にノートがありますのでお唱えした真言の遍数を記入ください。

※1月28日（初不動のご縁日）〜3月2日（結願の前日）迄の御真言の総数をもつて、

宥善和尚の徳を敬仰して逆修とし、かつ泰教の修行の無事をお祈り頂きたいと存じます。

同時に皆様のご修行として頂ければ幸甚に御座います。

平成二十九年師走吉祥日

日切大師 弘元寺 泰教 合掌